はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大は、社会の在り方、学校教育の在り方を強く問うことになった。未来の歴史の教科書に刻まれることになるであろう２０２０年。歴史的な社会の分岐点に居合わせた私たちが子ども達のために、今、すべきことは何かを考えなければならない。

学校教育の変わらない本質と新しい教育様式を見据え、学校、家庭、地域、行政等が総動員で迅速な取組を求められた令和２年度の本校の取組を整理し、今後も予想される困難を克服する方向性を模索するための資料としたい。

現在、脚光を浴びているＩＣＴ、オンラインの活用等のＧＩＧＡスクール構想に基づく取組や新しい生活様式に基づく取組については別の機会に述べることにし、学校教育の変わらない本質を堅持したコロナ禍における学校教育の在り方について､述べることにする。

Ⅰ　実践主題について

１　実践主題　「　コロナ禍における　学校教育の在り方　」

～学習的機能、社会的機能、福祉的機能の充実～

２　実践主題設定の理由

（１）学校教育目標の具現化を図るために

本校の教育目標は「ふるさとに誇りをもち、夢の実現に向けて共に努力する生徒の育成」である。この目標の実現を目指して、今年度の重点成果指標を年度当初の職員会議で素案を作成し、生徒会執行部、ＰＴＡ役員会の協議を経て決定した。１３項目の重点成果指標は、町内全戸を回覧し、地域にも周知した。

この重点成果指標については、定期的に到達状況を調査し、調査結果を教職員、生徒、保護者、地域にも知らせて、成果や課題を共有し、課題の解決策をそれぞれが主体的に取り組むＣＡＰ－Ｄシステムを生かした教育活動の質の向上に取り組んでいる。（※ＣＡＰ－Ｄシステムとは、ＰＤＣＡサイクルを、Ｃｈｅｃｋ「指標の到達状況点検」を起点に改善策に取り組むサイクルのことで、“ＣＡＰ”は「つま先」、“Ｄ”は「課題・解決策の発見（Discovery)」を意味する。教職員、生徒、保護者、地域のつま先を課題解決に向かわせるという意味の校長の造語である。）

この重点成果指標について、政府の非常事態宣言に伴う臨時休校明けの６月に実

令和２年度　御船中学校　重点成果指標

自　律	創　造	友　愛
落ち着いて生活する態度 **健やかな体**	**進路を切り拓く学力** **気づき、考え、行動する力**	**自分と同じように他の人を大切にできる心**
◎先生の説明や指示を真剣に聞く生徒の割合　９５％以上 ◎自分の健康や安全を考えて生活している生徒の割合　９０％以上 （安全、運動、食事） ◎家庭学習を始める時刻を決めて守っている生徒の割合　８０％以上 ◎スマートフォンやゲーム機等の使い方を保護者と約束して守っている（使用せずを含む）生徒の割合 ８０％以上	◎１時間の授業（教科）ごとに「できた」「わかった」「ためになった」と、いつも（ほとんど）感じる生徒の割合　７０％以上 ◎夢や目標の実現に向けて努力している生徒の割合　７０％以上 ◎自分の考えや意見を発表して「良かった」と感じたことがある生徒の割合　５０％以上 ◎御船中の生徒で良かったと思う生徒の割合　９４％以上	◎学校や地域を良くするために何をすべきか考えることがある生徒の割合 ６０％以上 ◎自分から、笑顔で、大きな声であいさつしている生徒の割合 ９０％以上 ◎思いやりの心をもって人に接する生活をしている生徒の割合 ９０％以上 ◎無言清掃している生徒の割合 ８０％以上 ◎感謝の気持ちを相手に伝えている生徒の割合　８０％以上

態を調査したところ、学力保障（学習的機能）、社会的・人間的な発達・成長の保障（社会的機能）、安心安全の保障（福祉的機能）に課題が見られ、実践主題に取り組むことにした。

（２）社会の要請から

休校中の学習機会の保障としてのＩＣＴの活用は、公立学校の大多数においてはハード面の整備の遅れや制度・運用ルールが円滑な教育活動の支障になっている場面が散見される。ＧＩＧＡスクール構想は、インフラ整備とデバイス配布、ICT活用の目的化・義務化が先行している面もあり、学校へのICT支援員の配置や単位時間・授業時数の弾力化、教員免許制度の見直しなどソフト整備と併せた取組みで学習環境の最適化を図っていく必要がある。

国内では、コロナ禍の休校措置で積極的不登校の家庭が増加傾向にあり、子ども達や若者の学ぶ意欲は一部を除き低下傾向に歯止めが掛からない状況にある。教職不人気の中に大量採用された経験の浅い教員の育成も、学校の負担増となっている。

このような状況の中、多様な子どもを誰一人取り残すことなく健やかな学び（学習的機能、社会的機能、福祉的機能）を保障する学校総体の取組が求められている。学校職員がワンチームとなった取組の中で、若い教職員を心身ともに逞しい教育者に育成することができると考える。

３　実践主題の捉え方

学習的機能とは、学習機会の保障、学力（知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力等）育成のための学校、教科指導・授業（講義・演習、探究・協働、実習・実技等）であり、総じて学力保障といえる。

社会的機能とは、社会的・人間的な発達・成長の保障（社会の形成者としての資質・能力〔協働性・社会性等〕の育成)、学びと生活の共同体（仲間・時間・空間）・場・土壌・文化としての学校、特別活動（学級活動、学校行事等)、キャリア教育、生徒指導等（子ども同士、教職員等との多様な他者とのつながり・関わり・集団活動・対話・協働等）であり、総じて関係保障といえる。

福祉的機能とは、安心安全の保障、身体的・精神的な健康の保障、安心安全な居場所・セーフティネットとしての学校、養護・保健、健康管理・心理的支援、寄り添い等（貧困・いじめ等の発見、生活リズムの構築、心のケア等）であり、総じて健康保障といえる。

Ⅱ　実践の方法

１　実践の仮説

（１）コロナ禍においても学習的機能を充実すれば、学校教育目標（重点成果指標）を達成できるだろう。

（２）コロナ禍においても社会的機能を充実すれば、学校教育目標（重点成果指標）を達成できるだろう。

（３）コロナ禍においても福祉的機能を充実すれば、学校教育目標（重点成果指標）を達成できるだろう。

２　実践の視点

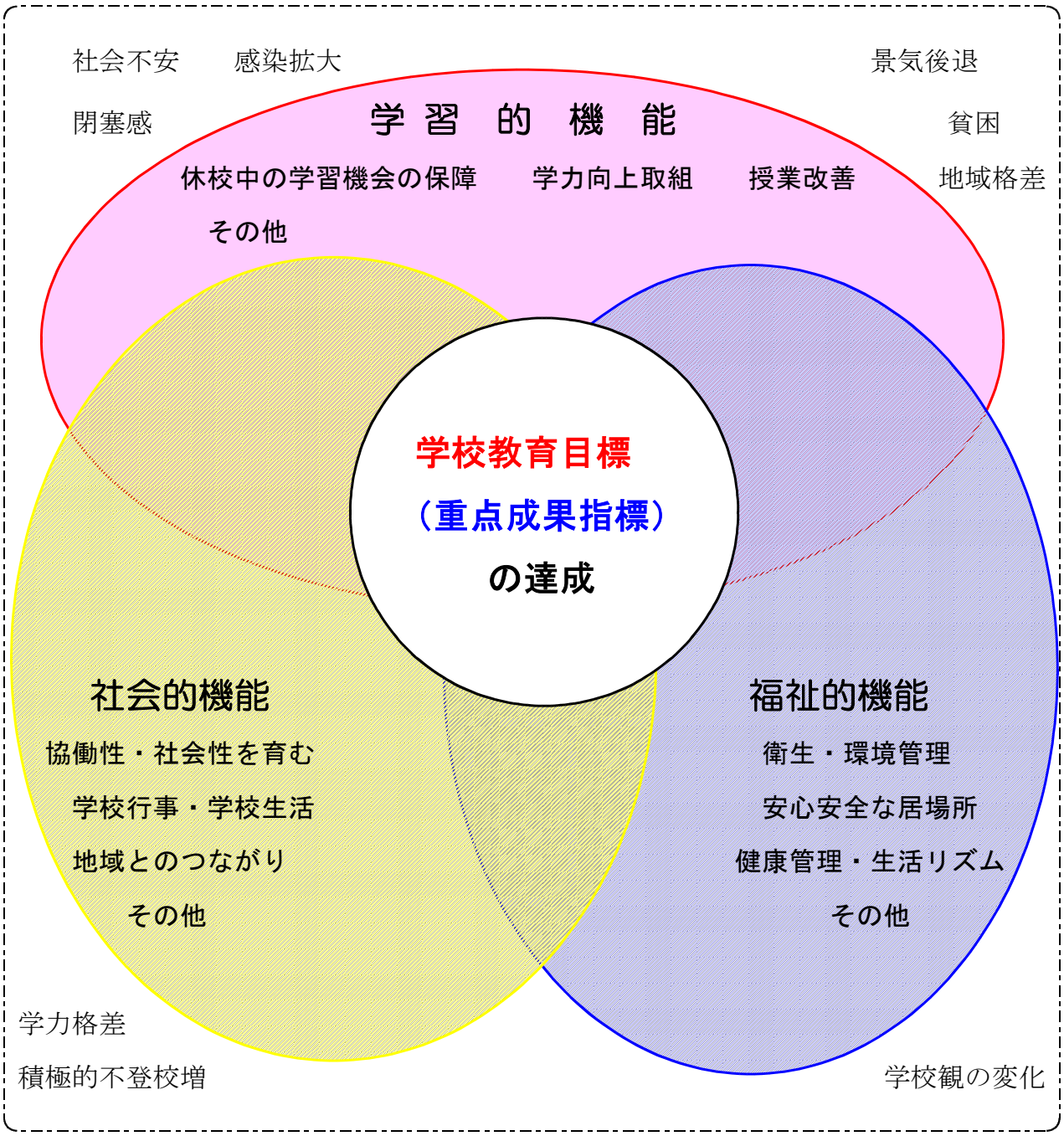
（１）コロナ禍において、学習的機能の充実を図るために、休校中の学習機会の保障、学力向上の取組、授業改善の取組を行う。

（２）コロナ禍において、社会的機能の充実を図るために、学校行事や学校生活に協働性・社会性を育む取組、地域とのつながりを感じる取組、夢や目標を育む取組を行う。

（３）コロナ禍において、福祉的機能の充実を図るために、衛生・環境管理の徹底、生

徒にとって安心安全な居場所作り、健康管理・生活リズムの構築の取組を行う。

３　実践の構想



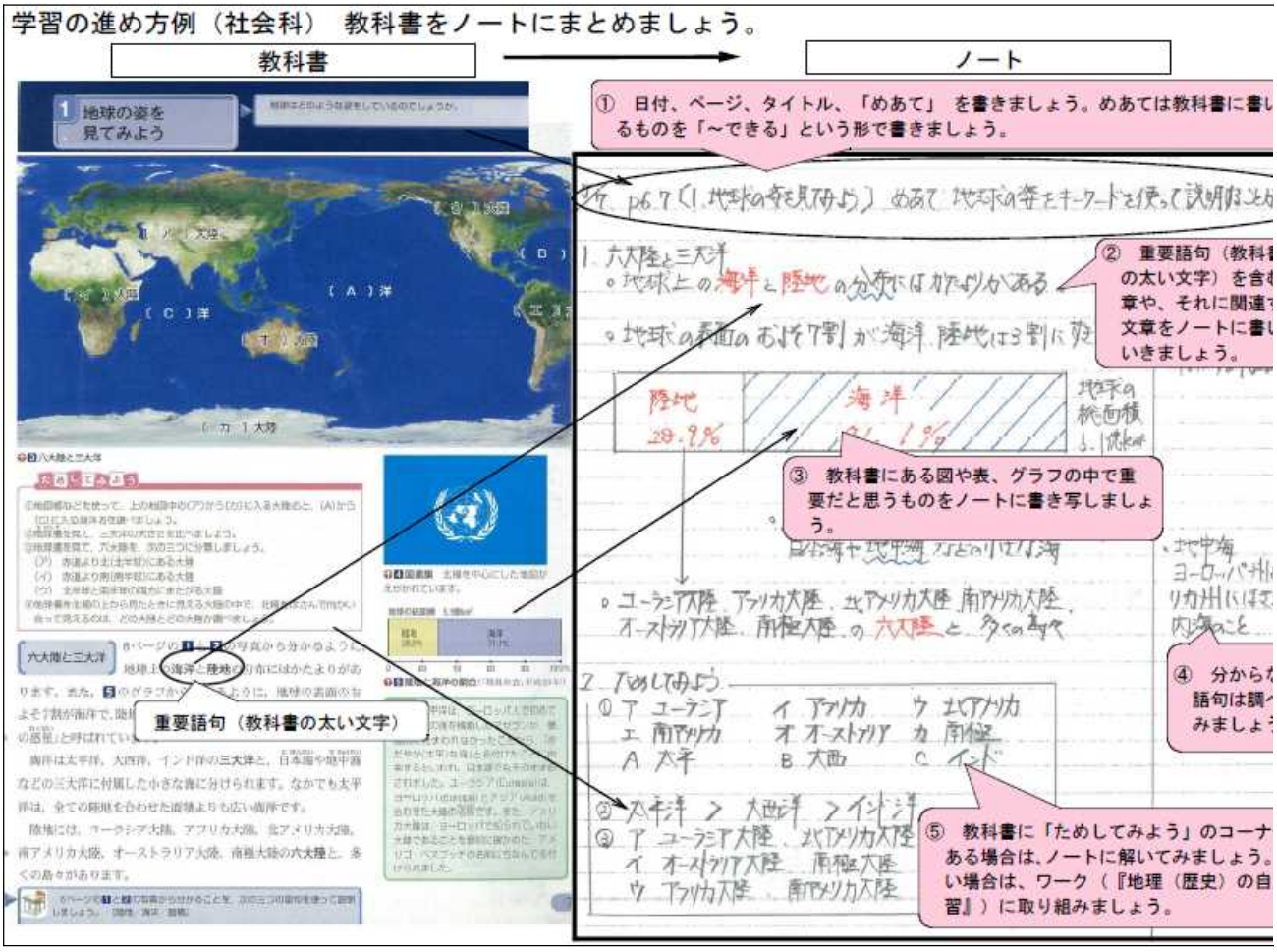
Ⅲ　実践の内容

１　学習的機能の充実

（１）休校中の学習機会の保障

①　自主学習の支援

プリントによる復習課題の提供と併せて、家庭における生徒の未習事項の学習を支援するために、国語、社会、数学、理科、英語の５教科については、教科書を使用した学習の進め方（例）を作成し、全校生徒に配布するとともに、学校ホームページに掲載した。



また、計画的に自主学習が進められるように、平日の授業時間帯を想定した「学習ガイダンス表」を週毎に作成し、全生徒に配布した。これも、前述と同様に学校ホームページに掲載した。このガイダンス表に沿って、生徒は家庭での学習を進めることができ、学校再開後の授業に円滑に参加できた。このことで、生徒が予習した内容は授業が効率的に進み、９月には年度当初の指導計画と授業の進捗が適合するようになった。特に入試を控えた３年生や入学したばかりで指導を十分に受けていない１年生の不安が軽減された。

さらに、「学習・生活ノート」を作成し、自主学習の進捗状況を生徒自身が確認し、生活リズムに留意するようにした。登校日等に、自主学習の内容と併せて「学習・生活ノート」を担任等が点検を行い、生徒への個別面談や指導を行った。

第１学年　学習ガイダンス表

御船町立御船中学校
５月８日（金）～１５日（金）

教科／日程	５月８日（金）	５月１１日（月）	５月１２日（火）	５月１３日（水）	５月１４日（木）	５月１５日（金）
国語		●漢字ノートＰ４～７ →丸付け・やり直しまで		●漢字ノートＰ８～１１ →丸付け・やり直しまで		●漢字ノート提出 ※テスト集を持って帰る
社会	地理の教科書ｐ６，７を見ながら，ワークｐ４の①に取り組む。 答え合わせをする。	地理の教科書ｐ５，７を参考に，地球が水の惑星と呼ばれる理由を考え，ノートに書く。	地理の教科書ｐ８，９を見ながら，ワークｐ４の②とｐ５の③に取り組む。 答え合わせをする。	地理の教科書ｐ８，９を参考に，どんなことを知りたい（確認したい）ときにどの世界地図を使うか具体的な場面を考え，ノートに書く。	地理の教科書ｐ１０，１１を見ながら，ワークｐ６の①とｐ７の③に取り組む。 答え合わせをする。	地理の教科書ｐ１２，１３を参考に，ノートに世界の略地図を描き，大まかに６つの州に区分する。また、大まかにアジア州を５つに区分する。
数学		教科書ｐ１０～ｐ１２をじっくりと読んでおく。 特に、太字の語句を覚え、例題を理解する。	数学の友ｐ２～ｐ３をやる。 基本例題は□の中に書き込み他は問題の下に書いていく。 自分で丸付けまでする。	教科書ｐ１３～ｐ１５をじっくりと読んでおく。 特に、太字の語句を覚え、例題をしっかり理解する。	数学の友ｐ４～ｐ５をやる。 基本例題は□の中に書き込み他は問題の下に解いていく。 自分で丸付けまでやっておく	登校日 数学の友を提出する。 数学のノートを持って帰る
理科		教科書：p.18～19 顕微鏡・双眼実体顕微鏡について、各部位の名称、それぞれの使い方を理科ノートにまとめる。	問題集：p.3(□5) 理科ノートに解いて丸付け、やり直しまでする。	教科書：p.27～29 花から果実への変化、花粉の運ばれ方、種子の運ばれ方について理科ノートにまとめる。	問題集 p.6～7(□3～5) 理科ノートに解いて丸付け、やり直しまでする。	理科ノートを提出する。
英語	休校中英語課題の１ページの単語を声に出して読みながら１０回ずつ書いて練習する。	休校中英語課題の２ページの単語を声に出して読みながら１０回ずつ書いて練習する。	休校中英語課題の３ページの単語を声に出して読みながら１０回ずつ書いて練習する。	休校中英語課題の４ページの単語を声に出して読みながら１０回ずつ書いて練習する。	休校中英語課題の５ページの単語を声に出して読みながら１０回ずつ書いて練習する。	登校日 休校中英語課題を提出する
音楽		音楽ノート①ｐ２～ｐ５を記入する。 教科書ｐ５２、ｐ７６～７７を参考にしましょう。わからないところだけで良いです。わからないところはそのままあけておいてください。				
美術	教科書 P2，3，4ページ「美術って何だろう？」を読み、自分が「うつくしい！」と感じるものや、美術に関係していると思うものを書いてみましょう。そして、美術とは何なのか、自分なりに感じたことをワークシート①にまとめましょう。					●ワークシート①提出
保健体育		保健教科書　保健編　①心身の発育と心の健康Ｐ８～Ｐ１１　体育編　①スポーツの多様性Ｐ１３２～Ｐ１３５　読む 体育実技教科書　体力を高める運動　①柔軟性を高める運動Ｐ１４～Ｐ１６　②巧みな運動を高める運動Ｐ１７～Ｐ１９ ③力強い動きを高める運動Ｐ２０～Ｐ２２　④動きを持続する能力を高める運動（ウォーキング OR ランニング 20′） ※　運動不足にならないよう１日に１時間程度実践してみよう。				
技術 ☆週に１回取り組もう！		①教科書P20～23（○材料と加工に関する技術について知ろう、○材料の特徴を知ろう）を読む。 ②教科書を調べて、学習ノートP6～7（1「材料の選び方」、2「材料の加工」、3「材料の特徴をまとめよう」）の空欄をうめる。　※2「材料の加工」は、①③⑤だけうめてください。				

☆上記の課題が終わったら、自主学習ノートにもぜひ取り組んでみよう！！

②　家庭訪問

本校は、今年度始めに半数の職員が入れ替わる大きな異動があった。転入した教職員が生徒の顔を覚えるまもなく、政府の非常事態宣言で４月１４日から臨時休校となった。

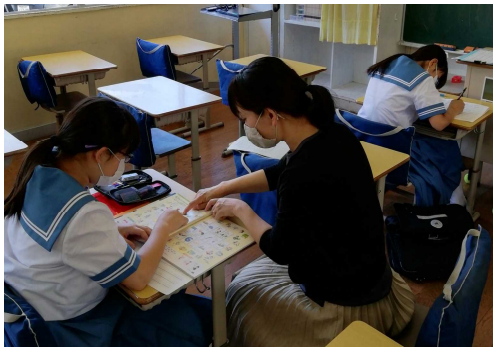
本校は、御船町に唯一の中学校であり、校区内に６つの小学校がある。その広さは９９．０３ｋｍ^2。広い校区であるが、新型コロナウイルスの感染防止に留意して、担任と副担任等のペアによる軒先訪問を実施し、生活の様子の把握と共に学習課題等の配布やミニ面談、個別指導を行った。

この家庭訪問は、後述する福祉的機能を果たし、保護者や生徒からは「休校中の先生の家庭訪問は、とても有り難かった。子どもや保護者が困っていることを聞き取っていただき、丁寧に対応いただいた。感謝します。」と好評だった。

③　自主学習会

学習が緩やかに進む生徒にとっては、教科書の説明や教師作成の解説を読み取って理解することは甚だ困難である。

休校中、希望する生徒・保護者には、教室を開放して自主学習を行えるようにした。



自主学習会の様子

教員が交替で教室で質問等に応え、個別指導を行った。

参加者が多い学年では、１教室に１０人ほどが笑顔で学習する姿があった。自宅待機が続く中で、友達や先生と会話できる機会は、心の安定にも効果的だった。

自主登校に対する保護者や地域の批判は一切なく、「休校中も、先生方の配慮で学校での自主学習ができて、子どもも喜んでいます。宜しくお願いします。」と電話でお礼を言われる保護者もあり、高い評価を受けた。また、本校職員からも「個別指導でコミュニケーションがとれた。」「一人で学習することが難しい生徒に学習支援が出来てよかった。」「学習状況が把握できた。参加した生徒は生活リズムを整えることができた。」等の意見が聞かれた。

④　分散登校による登校日の設定

休校中の家庭訪問や自主学習会で把握した生徒の困り感や生活状況を踏まえて、学習支援と心のケアを主目的に週１回の登校日を設けた。教室での密を避けるために、出席番号の奇数と偶数のグループごとに曜日や午前と午後を割り当てて登校日を設定した。登校日は、健康や生活の状況把握や提出課題の確認、新しい課題の説明の他に、教科担当による教科指導も実施した。教科指導を計画的に行ったことで、学習につまづきがある生徒への個別指導を行うことがで

きた。

本校職員からは「休校中の出席番号偶数と奇数に分かれての半日分散登校は、生徒に目が行き届いてよかった。負担なく授業をできたことも良かった。」との意見が聞かれた。

⑤　学校図書館の活用

コロナ禍の中で、各地の公立図書館は閉鎖か休校中の児童生徒の立ち入りを制限する状況になった。そこで、本校は、「本を読みたい。」「時間がたくさんあって、何をして良いかわからない。」との生徒の困り感の解消を図るために、自主学習や分散登校の帰りに学校図書館に立ち寄ることができるよう開放し、延べ５２人の生徒に８４冊貸し出すことができた。

（２）学力向上の取組

①　Morning Time、Share Timeの実践

授業に集中する一日の落ち着いた生活は、朝一番の教室での生活が鍵となる。生徒が私語をする中に学活で連絡事項を慌ただしく行い、一校時のスタートがバタバタと始まるのでは、特性のある生徒は落ち着きがないリズムのままに一日の見通しを持てずに学習に集中できない。教室の全員が静かに朝読書や朝自習に取り組み、シーンと呼吸の音さえ聞こえない中で一日の生活を始めることで、全ての生徒が“今為すべき事”に無言で取り組む構えが生まれる。

本校は、今年度、昨年度に比べて１校時のスタートを２０分間後ろにずらし、朝活動（Morning Time）の時間を確保した。４００人を超える生徒が学校にいながら、朝から物音一つしない静寂の時間がある。必要な個別指導や学年部職員間の打ち合わせに十分に時間も取れるようになった。

さらに、読書活動の推進のために、今年度から交替で１クラスが図書室で読書を行うようにした。

６月の学校再開当初は、３か月の休校で集団生活に順応できなくなった生徒もいたが、朝の落ち着いた時間を設けたことで授業に静かに参加できるようになった。本校職員からも「日課が変更され、朝の時間にゆとりができ、健康観察も丁寧にできるようになった。」「生徒が落ち着いて自習や読書に取り組み、一日のスタートが切れている。」「朝から、余裕をもった指導や学年部職員の打ち合わせができ、良かった。部活動の開始時刻は遅くなったが、生徒の落ち着いた生活を優

先したい。」との意見が聞かれた。

帰りの学活後に夕活動（Share Time）として、家庭での自主学習の進め方等を紹介し合う時間を設けた。この活動で、友達の優れた自主学習のやり方を学び、自分の学習に取り入れたり、学習開始時刻を固定して規則正しい家庭生活に取り組み始めた生徒もいる。

②　学力向上プロジェクトの実践

中学校は教科担任制であり、学校総体で時間を確保して学力向上に取り組むことに理解を示さない職員がいることが少なくない。「部活動の時間が短くなる」「学力調査対策のような取り組みは姑息だ」と言い、協力に難色を示す職員がいる学校もある。これが、全教科を担任する職員で構成された小学校との大きな違いでもある。

国や県の学力調査、学校の定期テストの前に、復習や補充学習を行い、生徒が「頑張ったら、テストで良い点数が取れた。」という経験も、学習意欲を高めるものである。また、年間数回の機会を捉えて学び直しの機会を設けることは、既習事項の定着を図るうえで効果的でもある。

全ての子どもの確かな学力の育成が学校の第一の責務であることを考えれば、自分の担当教科に関わらず、生徒に愛情をもって学力向上に取り組まなければならない。

本校は、今年度から１１月を学力向上月間に位置づけ、国語、数学、英語科教員を中心に、家庭学習とMorning Timeを関連づけた教科学習の時間を設けた。

（３）授業改善の取組

①　模擬授業研修

模擬授業研修会

生徒の学力向上の鍵は、教師の指導力である。

学力が十分についていない子ども達を担当教師が「この子たちは、全然勉強しない。」と批判するのは大きな間違いである。分かるような授業をしないから、生徒は学習に興味を失う。出来るような指導をしないから、生徒は諦める。自主学習できるような手だてをしないから、生徒は家庭学習をしないのである。

まさに“育てたように子は育つ”である。

つまり、私たちは教師である限り、真摯に指導の工夫改善に取り組まなければならない。通常なら、新規採用の職員も年度始めから教壇に立って授業を行う。コロナ禍の中、休校期間に授業技術を高めて生徒を迎える機会が生まれた。この千載一遇の好機に、本校の若手職員は、学校再開後の指導単元について模擬授業研修に取り組んだ。

教科の枠を超えて、互いに学び合い、学年主任が助言をし、町指導主事にも示唆をいただいた。１回目の模擬授業研修の１週間後に、指導・助言を生かした再研修を行い、著しい指導スキルの向上が見られた職員も多かった。県教委の初任者研修が簡素化された中に、授業の基本スキルを学ぶ研修を年度当初に設けることは効果的であり、次年度も時間を設定して実施したいと考える。

②　ＳＭＡＲＴな授業実践

授業は、学校教育法第３０条２項に示されたとおり、子どもに知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力の育成をめざして工夫・改善されなければならない。一部の任意研究団体に見られるような、指導の型を強要するするようなことは、そもそもの授業の目的を見失い、学習方法が硬直化し、発見や感動がある学びの機会を子どもから奪ってしまう危険性がある。

しかし、明治以来の学校教育制度の中で、数多くの教育実践者によって磨き上げられ継承されてきた効果的な指導法は、私たちが参考とすべきものである。あまたの優れた授業実践の中から精選し、一般的な留意点を「ＳＭＡＲＴな授業実践」としてまとめ、本稿の授業改善の視点とした。「ＳＭＡＲＴ」の意味は次のとおりである。

Ｓ：シンプル

学習内容の焦点化（本時の目標を達成するために、「教えること」と「考えさせることを整理して、活動の時間を確保する。）

簡潔で視覚で捉えやすい指示や説明・発問（指示や説明等を、明瞭な声で、短い言葉で、言い換えをしない。指示や説明・発問は、できるだけ板書（イラスト等）で示す。）

Ｍ：目的・目標

本時に「〇〇ができる、〇〇がわかる」が明確な『めあて』の提示（「めあて」を目に見える活動の標記にして、児童生徒と目指す姿を共有する。）

Ａ：アクティブ

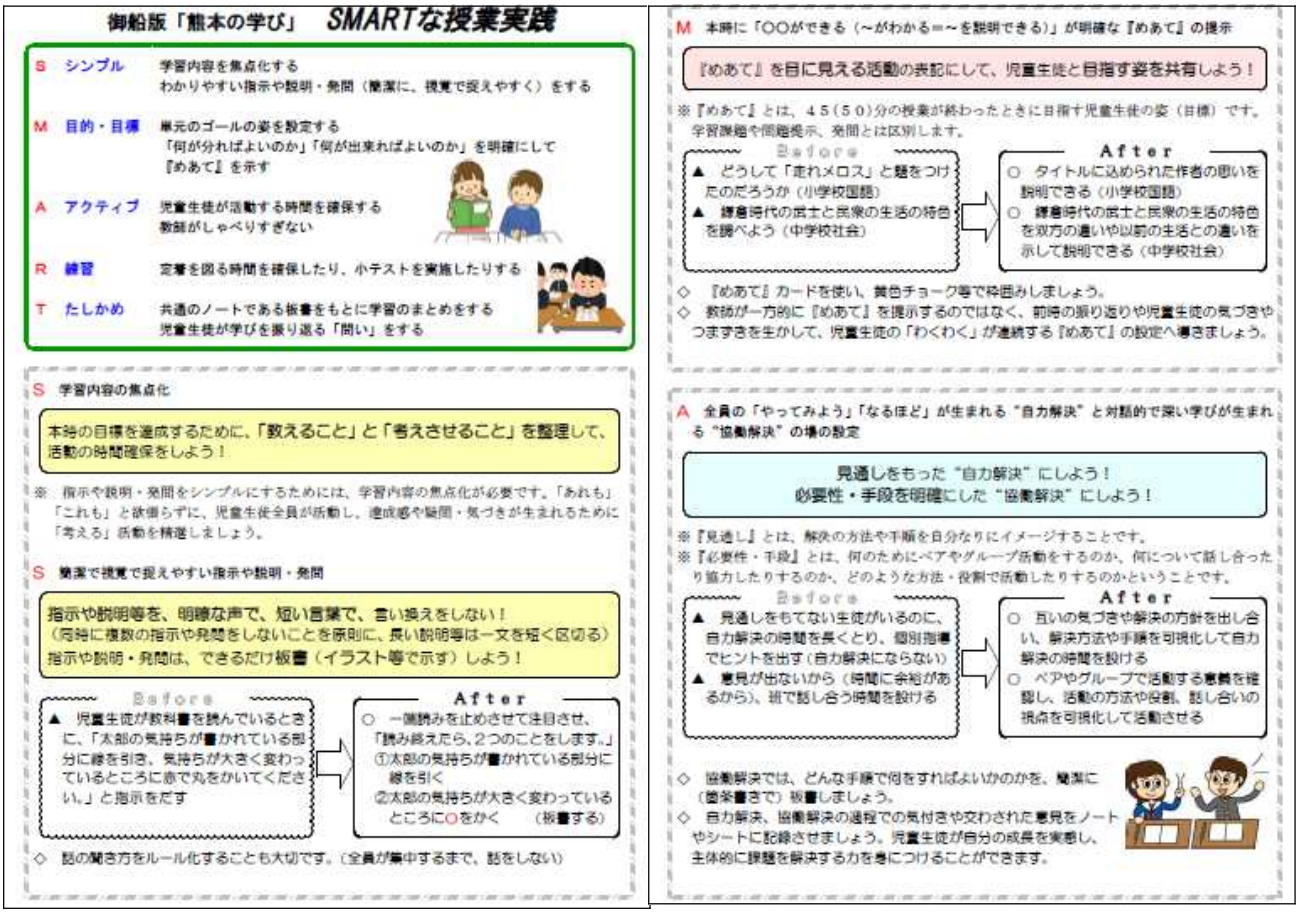
全員の「やってみよう」「なるほど」が生まれる「自力解決」と対話的で深い学びが生まれる「協働解決」の場の設定（見通しをもった「自力解決」、必要性、手段を明確にした「協働解決」にする。）

Ｒ：練習

定着を図る時間の確保、小テストの実施（「わかった」や「できた」を感じる時間を確保する。）

Ｔ：たしかめ

何を学んだかを明らかにする「まとめ」と、自分の学びを見つめる「ふりかえり」の実施（問いを工夫して、「まとめ」「ふりかえり」をする。）



リーフレットの一部

どれも、至極当然な事項であり、職員は自分が重点をおいて工夫・改善したい項目ごとにグループをつくり授業研究に取り組んだ。

また、校区内小学校との連携を推進するために、小学校の教務主任・研究主任等の意見を取り入れて『「御船版「熊本の学び」　ＳＭＡＲＴな授業実践』と題

したＡ３判２つ折りリーフレットを作成し、町内小中学校全教員に配布した。

③　分科会方式授業研究

前述のＳＭＡＲＴな授業実践について、各職員が重点をおいて授業改善に取り組むＳ、Ｍ、Ａ、Ｒ、Ｔのグループに分かれて、分科会方式で授業研究会を実施し、その成果や学びを全体会で共有する研修を行った。

この方式で研究授業を行うことで、研究授業の時間帯は他部会の職員が他学級の授業を担当して生徒を自習にすることがなくなった。また、一回の校内研修で５人の職員が研究授業を行うことができ、部会ごとの少人数の授業研究で協議を

火曜日	水曜日
２校時：Ｓ部会研究授業	２校時：Ｒ部会研究授業
３校時：Ｍ部会研究授業	３校時：Ｔ部会研究授業
４校時：Ａ部会研究授業	６校時：校内研修（授業研究会）

研究授業・授業研究会の日程例

深めることもできた。今年度３回の実施で、多くの職員が指導案を書き研究授業に取り組む機会を得ることになった。

④　教育実践発表会

地教委連が主催する教育論文の出品本数が年々減ってきている。働き方改革の推進から職員への論文作成の校長の促しが以前に比べて小さくなったことなどが理由として考えられる。

しかし、教職員が今年度の実践を振り返り整理することは、自身の職務に係る能力向上を図るうえで必要なことである。

そこで、本校は、年度まとめの校内研修に職員各自の教育実践発表会を２月に設定した。教職員の大量退職期に、互いの経験・実践で培われた理論や指導技術を学び合うとことは、とりわけ若い教職員にとっては貴重な学びの場となる。

中学校は、論文作成の追い込みの時期が、冬季の部活動の大会や入試事務の時期と重なり、小学校に比べて実践記録や教育論文の作成は後回しにされる傾向が強い。そこで、年度当初に実践記録の様式や書き方を示し、年間を通じて記録を少しずつ蓄積できるようにした。

この取組で、本校からの個人論文の応募は、昨年は初任者のみの１人だったのに対し、今年度は２７人が応募することになった。審査の方からの助言や励ましも、次年度に向けて職員一人一人の糧となるであろう。

この成果を吟味したうえで、コロナ禍が終息した後は、町内や郡内の教育実践発表会の開催についても提案を検討したい。

２　社会的機能の充実

（１）視点をもった学校行事精選と工夫

学校行事は、活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主性、実践的な態度を育てることを目的として行われるものである。全校又は学年を単位として、学校生活に秩序と変化を与え、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うことが求められる。

しかし、コロナ禍の三密を避けなければならない制約と、休校によって失われた授業時数を回復するために、学校行事の見直しや精選が求められることになった。

この学校行事の見直しと精選に当たっては、本校は「協働体験」「全員参加」を基軸にすえた検討を行い、実施した。その例が、体育大会と合唱コンクールである。

①　体育大会

参観者の数を制限するために、体育大会を半日開催にし保護者のみの参観とした学校は多い。本校においては、感染のリスクが最も高い会食を避けるためと併せて、不登校傾向の生徒が参加できる配慮として半日開催にした。

種目についても、練習が少なくて済む徒走等の個人種目に精選した学校も多いと聞くが、本校は協力が必要な団体種目のみに精選した。

【体育大会の全競技種目】

学年技巧競技（台風の目、玉入れ、長縄跳び）、学級対抗全員リレー

ソーラン節演舞（男女）、団対抗リレー

協働が求められる種目ばかりで、練習の過程から生徒が悩みながら心を通わせて解決し、一緒に感動を味わうことができた。協力する種目ばかりで、生徒は誰一人手を抜くことはなく懸命に競技した。参観された方から「例年なら、一生懸命に走らない生徒が数名いたが、今年は生徒全員が一生懸命で笑顔も多

かった。見ていて、とても面白かった。」との感想を聞いた。

練習期間に本校に会議で集まられた中学校、高校の校長先生方は生徒の様子を見て「御船中は勢いがありますね。」と感嘆の声を漏らされた。

不登校傾向の生徒も閉会後の解団式まで参加して、団画パネルの前で友だちや上級生と一緒にカメラの前で笑顔を見せていた。生徒の感想を紹介する。

優しい先輩に私もなりたい

上田紗智果＝中学１年（御船町）

中学校の体育大会は、応援の迫力や団結力の深さなど、小学校とは比べものにならないものでした。

私は、クラスの応援リーダーになりましたが、練習を始めた頃は、みんなの声が小さくてどうしたらよいか分からずに悩みました。

そこで、自分が大きな声を出さないとみんなの声も大きくならないと思い、恥ずかしがらずに大きな声を出すようにしました。私がクラスのみんなに声をかけると、３年生の団長も一緒に同じことを言ってくださり、大会が近づくにつれて、みんなも協力してくれて、応援の声が大きくなってきました。

ほかにも、２、３年生が「もっと前に出た方がいいよ」などと立ち位置を教えてくださったり、よさこいソーランの動きも丁寧に教えてくださったりしました。

大会当日も、先輩たちが私と一緒に応援してくださって、とてもうれしくて楽しい一日になりました。「黄団で良かった」と心から思いました。

私も先輩たちのような、下級生にも優しくて、かっこいい中学生になりたいと思いました。

応援リーダーで理想の姿に

増田穂乃香＝中学３年（御船町）

私は、今まで、人前に立って指示を出すのは恥ずかしくて、できませんでした。さらに、大きな声を出すことにはもっと抵抗がありました。しかし、人前で堂々としていられるのが私の理想の姿でした。その理想の姿に体育大会でなることができました。

９月に体育大会が開催されると聞いたとき、体育大会ができる喜びと感謝で、史上最高の体育大会にしようと友だちと話し合いました。そして、誰よりも自分が頑張ろうと思い、応援リーダーになることを決意しました。

最初は、みんなの声が全然出ていなくて、どうしたら声が出るようになるのかとたくさん考えました。考えた結果、私が誰よりも声を出して、みんなが声を出しやすい雰囲気を作ることが最も良い方法だと気づきました。

私が勇気をふり絞って大きな声を出すと、みんなの声もだんだんと大きくなり、他の団に負けないようになってきました。大声でないと伝わらないことや、指示は細かく出さないとみんなが困ることも分かりました。

そして、みんなのおかげで、一生忘れられない最高の体育大会になりました。これからも、自信をもっていろいろなことに挑戦していこうと思います。

熊本日日新聞に掲載された生徒作文

② 合唱コンクール

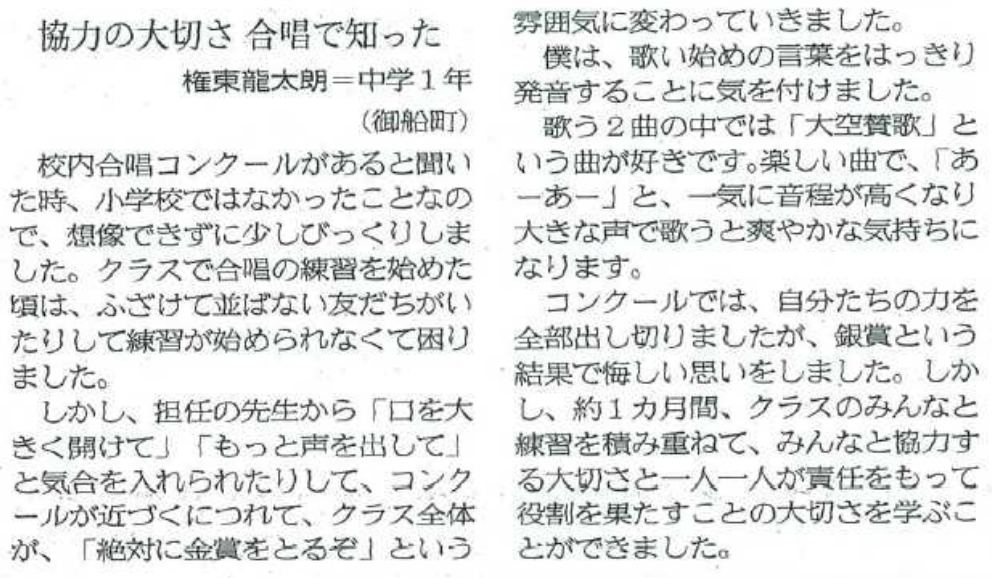
合唱コンクールは学級集団作りにおいて大きな意義がある。自我が芽生える思春期の中学生は、ともすれば「真剣に歌うなんて恥ずかしい」と思いがちで、荒

れた中学校では口さえ動かそうとしない生徒もいる。

生徒の心を開き、協力することの素晴らしさや「一生懸命はかっこいい」ことを確認させたいと、新型コロナウイルスの感染防止に十分留意をして合唱コンクールを実施した。

練習の過程で、合唱の経験のない１年生が、休み時間に合唱練習する３年生の様子を参観したり、本気になれない生徒たちに学年部職員が心情に訴える話をしたりするなどの、生徒と生徒を繋ぐこだわりをもった指導の工夫を行った。

コロナ禍の中で、感染防止を第一に学年分散のコンクールを実施された学校やオンラインのコンクールを実施された学校があると聞く。学校規模等の違いもあり一概には述べられないが、下級生が上級生の真剣な姿を一緒の空間で直に見ることは、学校文化を繋いでいくうえで大きな意味があったと考える。



協力の大切さ 合唱で知った

権東龍太朗＝中学１年（御船町）

校内合唱コンクールがあると聞いた時、小学校ではなかったことなので、想像できずに少しびっくりしました。クラスで合唱の練習を始めた頃は、ふざけて並ばない友だちがいたりして練習が始められなくて困りました。

しかし、担任の先生から「口を大きく開けて」「もっと声を出して」と気合を入れられたりして、コンクールが近づくにつれて、クラス全体が、「絶対に金賞をとるぞ」という雰囲気に変わっていきました。

僕は、歌い始めの言葉をはっきり発音することに気を付けました。

歌う２曲の中では「大空賛歌」という曲が好きです。楽しい曲で、「あーあー」と、一気に音程が高くなり大きな声で歌うと爽やかな気持ちになります。

コンクールでは、自分たちの力を全部出し切りましたが、銀賞という結果で悔しい思いをしました。しかし、約１カ月間、クラスのみんなと練習を積み重ねて、みんなと協力する大切さと一人一人が責任をもって役割を果たすことの大切さを学ぶことができました。

熊本日日新聞に掲載された生徒作文

審査をいただいた平成音楽大学の岩山学部長からも「感動で足が震えた。」とお褒めの言葉をいただくことができた。

また、学校行事の意義について保護者や地域の方に、学校だよりで周知を図った。学校だよりは、学校の様子を知らせるだけでなく、保護者や地域の啓発手段として活用している。裏面には、家庭や地域で話題にしていただきたい著名人のスピーチの概要を紹介している。

同様に、新聞への生徒作文の投稿を定期的に行っている。コロナ禍の中では、学校を開く取組に制約があるが、生徒の活動や意見等を地域の方に知っていただくには、新聞掲載は有効である。地域に方から「新聞を見たよ。」と声を掛けら

れ、自尊感情や地域から見守られている安心感を高めている生徒は多い。

（２）学校生活の工夫

日常の学校生活においても、協働性や社会性を育むために、新型コロナウイルスの感染防止に留意しつつ、様々な工夫を行っている。その主なものが、集会活動と掃除の縦割り班活動である。

①　集会活動

学校再開当初は全校生徒への連絡等は、校内放送や学級担任からクラス別伝達で行っていた。しかし、異学年生徒間の意見の交流が極端に少なくなく、価値観の共有や集団への所属意識に課題がみられる様子があった。そこで、生徒の間隔を十分に確保して９月から学年集会を、１１月から全校集会を実施することにした。

集会を実施したことで、お互いの表情を見て話を聞き、全校生徒で目指す方向や留意する事柄を確認し合うことができた。リーダーとなるべき生徒が、今年度初めて大勢の生徒の前に立ち自分の言葉で呼びかけを行う姿からは、緊張が読み取れた。しかし、集会を終えた後の表情は達成感に溢れ、学校のためや地域のために出来ることを、さらに考えていこうとする意欲も聞き取れた。

②　学年縦割り班による清掃活動

学年縦割り班活動は、小学校では珍しいものではない。しかし、中学校では、小規模校を除いて縦割り班活動を行う学校は極めて少ない。それは、前述した思春期特有の照れや見栄による上級生の活動停滞、荒れた学校では上級生による下級生の虐待、担当職員が生徒の顔や名前を把握できずに指導が不徹底になる等の理由がある。

本校は、学年を超えて協力する姿や上級生の自覚を育もうと、学年縦割り班による無言清掃活動に取り組んでいる。そこには、上級生と下級生が協力して美化活動をする姿や上級生が下級生の手本として率先垂範する姿が生まれている。

（３）創意工夫が生まれる生徒会活動

生徒自らが、気づき、考え、行動することで、協働性や社会性が大きく育ち、夢や目標をもって生活をさらにより良いものにしようとする意識や態度が生まれる。コロナ禍で例年どおりの活動ができなくなった生徒会活動では、生徒のアイデア生かした新しい取組を数多く行った。

①　募金活動

７月に県南は豪雨により大きな被害を受けた。生徒たちは、その報道を聞き「自分たちにできることはないか」と職員に相談した。平成２８年熊本地震の際に、被災して本校から転出した生徒の受け入れ先の芦北町の中学校から義援金をいただいた経緯があったことを生徒に知らせ、芦北町の学校に義援金と応援メッセージを送ることになった。生徒会執行部とＪＲＣ委員会が中心になり、募金活動と全校生徒のメッセージ作成を行った。

夏季休業中に校長と生徒会担当が芦北町の佐敷中学校を訪問して義援金とメッセージを手渡し、その様子を全校生徒に報告した。

この取組と男子バスケットボール部が６年間続けている地域の清掃ボランティアは県教育委員会の善行表彰を受けた。県内で２つの団対表彰を受けたのは本校だけである。

②　あいさつ運動

本校生徒のあいさつの様子は、これまでは必ずしも芳しくなかった。あいさつは、上級学校での生活や社会生活においても先輩や上司の協力を得て活躍するうえでも、コミュニメーションの基本としても必要不可欠なものである。生徒会執行部が重点取組に位置付け、部活動ごと等の工夫したあいさつ運動を展開した。今年度、本校に赴任した職員も意欲的に登校時や下校時に正門や昇降口にたち、率先してあいさつを行った。

その結果、まだ声が小さい生徒がいるものの全生徒が声を出してあいさつするようになった。地域の方からも「中学生がよくあいさつしてくれます。」とお褒めの言葉を多くいただくようになった。職員のあいさつの声も大きくなってきた。

今後は“２０ｍ先でも聞こえるあいさつ”をスローガンに、地域であいさつの声が響く学校を目指したい。

③　シンボルロードのプランター設置

生徒会美化委員会は、地域に貢献できる活動を考え、学校のフェンスにシンボルロードに向けて花を植えたプランターを設置した。美化委員の生徒が定期的に花に水をやっている。地域の方からも「きれいですね」との声が寄せられている。

④　年賀状送付

例年であれば、学校行事や諸活動で生徒が地域の方と触れ合う場面が数多くあ

る。しかしながら、今年度は交流を控えざるを得ない状況だった。そこで、今年度は、生徒会役員が入学式や卒業式に来賓としてお招きできなかった町内在住の方に年賀状を出した。地域の方の顔を思い出しながら文面を書く生徒や、「どんな人だったっけ。」と地域の方に関心を高める生徒の様子があった。

多くの地域に方から生徒に返事があり、感謝の言葉や励ましの言葉をいただいた。

３　福祉的機能の充実

（１）衛生・環境整備

①　衛生管理の徹底

文部科学省が示す生活様式に則り、生徒のマスク着用や検温、健康チェックや非対面式の給食，職員による毎日の消毒等は、いずれの学校でも行っていることであり、本校でも徹底して実施している。

これに加えて、郡内小中高校の中でいち早く玄関にタブレット型のマスク着用検知付き非接触検温器を設置した。これは、来校者の検温を無人で行える実務的な効果だけでなく、保護者や生徒の安心感を高める効果がある。

②　徹底した環境整備

整った環境が生徒の衛生管理意識を高め、落ち着いた生活を創造する。

校長、用務員、支援員がこまめに校内の除草、樹木の枝伐採、ゴミ拾いを行うことにした。校舎内も雑巾のかけ方トイレのスリッパ並べ、机の整列を徹底している。長年、地域未来塾講師としてお世話になっている方や学校を時折参観される民生委員の方々から「きれいにしていますね。」と評価いただいている。

また、老朽化した自転車小屋を、休校期間を活用して職員がペンキ塗りで一新することも行った。「在宅勤務よりも、ソーシャルディスタンスをとって、生徒のために出来ることをしましょう。」と職員は口々に言っている。

さらに､今年度から部活動生徒が参加した学期末の大掃除を始めることにした。生徒自身が環境整備への関心を高め、安全で美しい学校づくりが進んでいる。

（２）安心安全な居場所づくり

①　ローラー方式の教育相談

長い休校で、友人関係が崩れたり、ストレスや不安で表情が暗い生徒がいるこ

とにアンケート調査や分散登校時の観察で気づいた。そこで、不安傾向が強い、３年女子、１年女子、・・・の順で、職員がチームを組み、全生徒を対象に教育相談を実施した。生徒が不安をもつ背景や原因を理解し、生徒と一緒に解決策を考えた。多くの生徒は、悩みを聞いてもらう機会があったことで心のケアにつながり、専門的なカウンセリングが必要な生徒はスクールカウンセラーや医療機関に繋ぐことができた。ローラー方式の教育相談で、生徒が悩みを教師に相談できる関係を早めに構築することができた。欠席日数が昨年度に比べてて減っている３年生、２年生が多いことは、その効果の一端と考える。

②　不登校対策

不登校生徒は本校も増加している。これは、長い休校の影響で全国的に増えている積極的な不登校との関係は不明であるが、生活リズムの崩れや耐性の低下、通学の目的喪失など、休校の影響がないとは言えない。

ただ、不登校や不登校傾向を示す生徒の多くが、発達特性を有していたり、家庭環境が厳しかったりする状況を鑑みれば、教育を受ける機会を保障し、安心安全な居場所を確保するためにも、不登校の解消・予防の取組が必要である。

家庭訪問や個別指導等の他に、ＳＳＷを活用した保護者の支援、学期に１回の保護者の会等の取組を行っている。今後は、地教委による町雇用のＳＳＷを配置した教育支援センターの設置も要望していかねばならない。９年間、児童生徒を見守り、保護者との良好な関係を築いたうえで、大胆な提案や支援ができる町ＳＳＷが必要である。

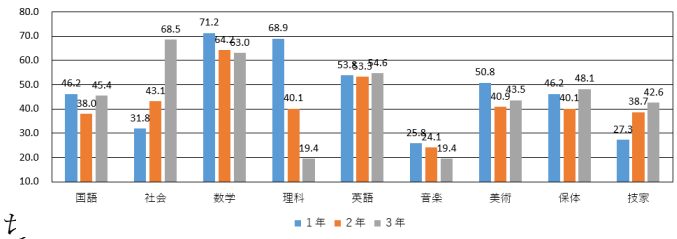
この他に、基本的な生活習慣を阻害し、トラブルの元凶にもなっているスマートフォンや通信タブレット、ゲーム機の使用について、ＰＴＡと連携して家庭で約束を決めさせ、通知表で生徒に自己評価を記述させる取組を行い。徐々に改善が図れている。

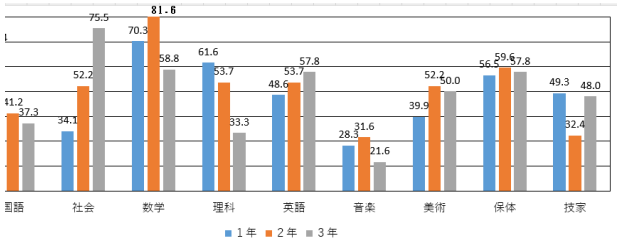
Ⅳ　実践の成果と課題

１　実践の成果

紙面の都合で、重点成果指標に関する調査結果を全て掲載することはできないが、授業の工夫改善が生徒の達成感を高めている状況が下のグラフに表れている。この他にも「御船中の生徒で良かった」と回答する生徒の割合が８ポイント程度向上してい

る。「意見を発表してよかった」と回答する生徒の割合や生活習慣に関する状況等、１３項目中８項目に改善の傾向が見られ、本年度の取組の成果と考える。学習的機能、社会的機能、福祉的機能の充実を意識した取組が、現在の生徒の落ち着いた生活、明るい表情を生んでいる。





毎時間の授業で「できた」「わかった」「ためになった」と感じる生徒の割合
左のグラフは学校再開一月後の6月25日、右のグラフは11月26日

昨年度は９月以降に１日も登校できなかったが、今年度の学校再開後は１日も休まずに登校できている男子生徒がいる。

２　課題と今後の志向

生徒の学力の状況や不登校生徒の数には、まだ未解決課題が示されている。今後も、学習的機能、社会的機能、福祉的機能の視点をもって、コロナ禍の学校教育の充実に取り組まなければならない。今年度末に生徒一人に一台整備される通信タブレットを活用した新たな取組と同時に、教育の不易を追求した教育の充実もさらに図っていきたいと考える。

おわりに

上益城は、平成２８年熊本地震で大きな被害を受け、この震災から多くの教訓を学んだ。コロナ禍における取組もレガシーとして、未来に受け継いでもらいたいと考えまとめてみた。多くの保護者や地域の方々の温かい支援で、生徒会スローガンである『　改革　～向上心をもち　新しいことに挑み　前進し続ける学校～　』を目指し、生徒と職員が一体となって教育の充実に取り組んでいる途中である。

先輩諸氏にご高覧いただき、忌憚のないご教示をお願いするところである。

参考文献：中央教育審議会「新しい時代の初等中等教育部会」資料